

### 学校周辺のチョウ類の調査

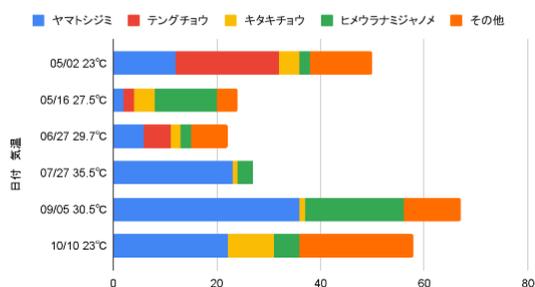
#### ・学校周辺のチョウ

4年間、毎週部活の時に見つけたチョウを記録し、種類と個体数を調べました。4年間で見られたチョウは55種類です。絶滅危惧1B種のツマグロキチョウ、準絶滅危惧種のオオムラサキや、ウラムシジミ、ウラギンヒョウモン、ホソバセセリやオオチャバネセセリなど珍しいチョウを見つけることができました。

#### ・チョウとシカの関係について

中でも多く見られたのは、ヤマトシジミ、テングチョウ、キタキチョウです。これらは、シカが苦手になっている植物や、木などのシカが食べられないものが多く、逆に、あまり見られなかったウラギンヒョウモンやミドリヒョウモンなどは、シカが好んで食べる植物であることが分かった。しかし、ヒメウラナミジャノメなど、シカが普通に食べるのに、多くいるチョウも見られました。

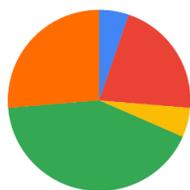
個体数と日付



● つる ● イネ科 ● 笹 ● 草 ● 木

#### ・4年間の個体数の変化

テングチョウは、最初の二年は、大量発生していたのに、ここ二年では、15匹ずつしか見られていない。



理由として考えられるのは、雪がおおく積もった翌年の発生が少なくなると思う。しかし、今年は、雪があまり積もらなかったのに、テングチョウが全く見られていない。なので、雪以外のものに影響があるのかもしれない。また、アカシジミとウラナミアカシジミも最初の二年はよく見られたのに、ここ二年では、20匹とウラナミアカシジミに関しては見られなくなった。理由として、栗の花が咲く時期とアカシジミの発生の時期が異なったためだと考えられる。また、アカシジミとテングチョウの数が減ったのは両方一昨年なのでテングチョウとアカシジミとの関係も今後調べたいと思います。

### ○学校周辺の冬虫夏草

広義における冬虫夏草の種数、生息地、生息環境の調査

昨年度からの調査で、カMEMシタケ、メタリジウム・シリンドロスポルム、ハナサナギタケ、ツクツクボウシタケ、イトヒキミジンアリタケ、ポーベリア・バシアーナ、カブトムシ生の不明種が採取できた。



イトヒキミジンアリタケ(写真左)においては坪があった。

ツクツクボウシタケ(写真右)

カブトムシの幼虫生の冬虫夏草は、外にある落ち葉を捨てる場所から採取したカブトムシの幼虫を飼育中に発生したもので、追培養を試みたが、不稔個体となった。

### ○学校周辺のカニムシ類の調査

調査内容は主にカニムシの生息地、種数、個体数について調べています。

学校周辺ではトゲヤドリカニムシ、イエカニムシ、コナカニムシ(不明)、カブトツチカニムシ(不明)が採集されたトゲヤドリカニムシはそれなりに広範囲で採集されたが、イエカニムシとコナカニムシはビオトープ周辺のみで一匹ずつ採集されたカブトツチカニムシと思われるカニムシは学校近くの沢周辺の一地点でのみ5匹採取された。トゲヤドリカニムシは飼育も試みたが夏休み期間中に干からびてしまった。しかし、抱卵は確認できた。

カブトツチカニムシと思われる土壌生のカニムシは同定するための論文が公開されていなかったため、確証は持てない。岡山県では採集記録はあるものの、兵庫県での記録は自分が探したあたりだと見当たらなかったため、未記載種である可能性は否定できない。今後は現存する方法で土壌環境を評価し、ツルグレン装置によって得られたカニムシの種類によって評価し土壌環境の評価と比較し、カニムシはどれほど環境の指標となる生物なのかを調べる。土壌の採集場所は環境を変えて採集する予定である。評価は主にPH、含水量、有機物量、落ち葉の比率、全体の生物量などを比較する

○学